両親関係の情緒的安定性が青年の適応に与える影響^{1,2} ——日本語版 SIS の作成を通して——

廣瀬 愛希子³ 濱口 佳和 筑波大学

**The effect of emotional security in the interparental relationship on adolescent adjustment:
The development of a Japanese version of the Security in the Interparental Subsystem Scale**

Akiko Hirose and Yoshikazu Hamaguchi (University of Tsukuba)

The purpose of this study was to develop and examine the reliability and validity of a Japanese version of the Security in the Interparental Subsystem Scale (SIS), which measures children's emotional security in the interparental relationship through self-assessment of their reactions to interparental conflict. We then examined the mediation model of emotional security between interparental conflict and children's adjustment, as proposed in Emotional Security Theory (EST). A questionnaire study was conducted with 682 middle and high school students between 12 and 18 years of age (mean age = 14.80 years, $SD = 1.50$ years). The results of confirmatory factor analysis supported the theoretical model of EST, and the reliability and validity of the Japanese version of the SIS were demonstrated. Mediation analysis revealed mediated effects of emotional insecurity in the relationship between interparental conflict and children's anxiety/depression and aggression. These results suggest that the theoretical model of EST can be effectively applied in Japan.

Key words: interparental conflict, emotional security, adolescents, depression, aggression.

The Japanese Journal of Psychology

2021, Vol. 92, No. 2, pp. 129-139

J-STAGE Advanced published date: March 31, 2021, <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.19229>

2018 年度の未成年の子どもがいる親の離婚件数は約 12 万件で、年間約 21 万人の子どもが親の離婚を経験している（厚生労働省、2020）。また近年、子どもが保護者間の暴力にさらされる面前 DV が深刻化している。2018 年度に警察が通告した心理的虐待のうち約 6 割が面前 DV であり、通告児童数は約 3 万 6 千人に上る（警察庁、2019）。

離婚などの深刻な関係性の問題に至らないまでも、両親関係の問題を抱える子どもは多くいる。特に、子どもが青年期の頃は、親が職場環境や年齢の変化によ

りストレスを感じやすく、多発する子どものライフイベントへの対応を迫られることから（菅原、2016）、両親間の葛藤が生じやすい。また、青年は両親の夫婦としてのあり方をより敏感に感じとるようになる（Davies, Dumenci, & Windle, 1999）。以上より、青年期は両親関係の否定的な影響を受けるリスクが高い時期であると考えられる。

青年期を含む子どもの適応と両親関係に関する研究は、欧米を中心に行われている。両親関係の側面の中でも、両親間葛藤（interparental conflict: 以下、IC とする）が子どもの適応へ多大な影響を及ぼすことが明らかになり、IC の影響に着目した研究がなされてきた。1990 年代以降は発達精神病理学的な観点から、IC がどのように子どもの発達へ影響を及ぼすのかというプロセス指向的な枠組みの理解が重視されるようになった。こうした流れの中で、IC の子どもへの影響について以下の点が明らかになっている。

第一に、IC の有無より IC の質が、子どもへの影響に深く関わっている点である。近年、IC はその様式により建設的 IC（constructive interparental conflict: 相

Correspondence concerning this article should be sent to: Akiko Hirose, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572, Japan. (E-mail: hirose.aki23@gmail.com)

¹ 本研究結果の一部は、日本発達心理学会第 29 回大会（2017）、40th International School Psychology Association Conference（2018）で発表された。

² 本論文は第 1 著者が平成 29 年度に筑波大学人間総合科学研究科へ提出した修士論文の一部を再分析・再構成したものである。

³ 本調査にご協力いただきました生徒の皆様、ならびに学校の先生方に心から感謝申し上げます。

互に支持的な姿勢であり、問題解決を目標とする IC) と、破壊的 IC (destructive interparental conflict: 高い敵意や葛藤の激しさ、未解決を特徴とする IC) に区別して研究がなされている (Davies, Martin, & Cicchetti, 2012)。前者は子どもに負荷が少なく、対人的葛藤の解決方略を学ばせるなどの肯定的な結果につながる一方で、後者は子どもの発達へリスクをもたらす、様々な適応問題と関連することが示されている (Cummings, Davies, & Campbell, 2000 松浦訳 2006)。IC の影響性を理解するために、IC が建設的か破壊的かという枠組みから捉えてその質を区別することが求められる。第二に、IC についての子どもの認知・情緒が、IC と子どもの適応間の媒介的役割をもつ点である。子どもの IC の受けとめ方によって子どもの適応への影響が異なることが示され、子どもの視点から IC を捉える重要性が指摘されている (Davies & Cummings, 1994; Grych & Fincham, 1990)。第三に、子どもの個人要因や文脈要因が、IC の子どもへの影響に関わる点である。例えば、女子のほうが男子より、IC への介入の必要性や、自己非難、恐れを感じやすいなど、IC の影響には性差があることが示されている (Grych, Harold, & Miles, 2003)。

情緒的安定性理論 (emotional security theory: 以下、EST とする; Davies & Cummings, 1994) は、以上の研究知見を踏まえて提唱された、IC の影響性のメカニズムを説明する代表的な理論である⁴。EST は、アタッチメント理論の考えに基づき、家族関係の文脈の中で子どもの情緒的安定性 (emotional security)⁵ がどのように形成され、子どもの適応へ影響するかを発達の観点から説明する。EST では、これまでの家族関係の文脈の中で形成された情緒的安定性が媒介となって、子どもの発達へ影響を与える媒介モデルを想定している。アタッチメント理論と異なる点は、子どもの情緒的安定性が親子関係だけでなく両親関係からも導かれるとし、両親関係を子どもの発達に関わる重要な要因として位置づけている点である。EST では、両親関係の子どもへの影響性について、破壊的 IC が子どもの両親関係の情緒的安定性 (emotional security in the interparental relationship⁶) を不安定にすることで適応問

題を導くと考えられる (Davies & Cummings, 1994)。先行研究では、情緒的不安定性⁷ が、子どもの内在・外在化問題や対人関係の問題、学校不適応、情動制御の問題といった様々な適応問題と関連することが示されている (Davies, Martin, & Sturge-Apple, 2016)。

EST では、子どもが IC に直面した際、安全・安心の感覚を維持するための反応プロセスがあると仮定し、情緒的安定性がこの反応プロセスを組織化する働きをもつと考える (Davies & Cummings, 1994)。IC 時の子どもの反応プロセスには、情緒的反応の調整、IC 直面に対する自己統制、家族に関する内的表象の三つがある⁸ (Davies & Cummings, 1994)。これらの反応プロセスは、IC 時の安全・安心の感覚を維持・回復させる効果をもつが、長期的にみた場合、子どもの適応へ悪影響を及ぼす。IC の頻発で反応プロセスが繰り返されると、心的エネルギーの消耗による反応調整の困難や、不適応的な行動パターンの助長、高いストレスがもたらされ、結果的に子どもの不適応への脆弱性を高めてしまう (Davies et al., 2002)。

情緒的不安定性が高い子どもの場合、IC 時に安全・安心の感覚を維持するために、IC へ激しい情緒的反応を示したり、IC に対する過度な対処行動をとったり、両親関係について破壊的な表象をもつ (Davies et al., 2002)。反対に、情緒的不安定性が低い子どもは、IC へ激しい情緒的反応や過度な対処行動を示すことはなく、両親関係について安定した表象をもっている。このことから、子どもが IC 時にどのような反応プロセスを示すかをみることで、その子どもの情緒的安定性を推論することができる (Davies & Cummings, 1994)。

このことを踏まえて、Davies et al. (2002) は、情緒的安定性の測定尺度として、Security in the Interparen-

⁶ “interparental relationship” への日本語の定訳はまだない。本論文では、「両親関係」という言葉をあてた。

⁷ 情緒的不安定性 (emotional insecurity) とは、不安定な状態の情緒的安定性を表す。以降の情緒的安定性 (情緒的不安定性) は、子どもの両親関係の情緒的安定性 (情緒的不安定性) を指すものとする。

⁸ 情緒的反応の調整は、IC に関する刺激への覚醒性や、恐怖、警戒などの情緒的反応の増減に関わる調整であり、予測される IC の脅威を素早く察知し、早急にストレスに対処できるよう心理的、身体的資源の利用可能性を高められるように機能する (Davies et al., 2016)。IC 直面に対する自己統制は、IC にさらされている状態を何らかの形で統制しようとする反応であり、自ら両親に関わることで IC を収めようとする関与的な反応と、両親から離れてその脅威を避ける回避的な反応がある (Davies et al., 2016)。家族に関する内的表象は、IC が家族や自身にとってどのような意味をもつかに関する表象であり、今までの両親関係に関わる経験から形成される。形成された内的表象は、家族や自身の安全・安心を損ねる可能性がある両親間の出来事を認識・予測するための指標となる (Davies, Forman, Rasi, & Stevens, 2002)。

⁴ もう一つの代表的な理論に認知状況的枠組理論 (cognitive-contextual framework theory; Grych & Fincham, 1990) がある。この理論は EST 同様、IC の影響は子どもの認知・情緒が媒介的役割を果たすと考えられる。EST は認知状況的枠組理論に基づきつつ、発達の枠組みをもたないなどの認知状況的枠組理論の問題点を補う理論として提唱された (Davies & Cummings, 1994)。

⁵ Cummings & Davies (1996) は、情緒的安定性の定義や機能について、「子どもの感情、行動、思考そして生理的反応の全体的な組織と意味から推論される潜在的構造であり、子どもが対人的状況における自身の機能を調整し、それにより社会的、感情的、認知的そして生理的反応を管理することを目的として機能する」と仮定している (Cummings et al., 2000 松浦訳 2006)。

tal Subsystem Scale (以下, SIS とする)を開発した。SIS は、青年期の子どもを対象とした自記式の尺度であり⁹、上述した IC 時の反応プロセスを尋ねることで、情緒的安定性を測定する (Davies et al., 2002)。SIS の下位尺度は、情緒的反応の調整の「情緒的反応」・「行動統制不全」、IC 直面に対する自己統制の「葛藤への回避」・「葛藤への関与」、家族に関する内的表象の「建設的な家族表象」・「破壊的な家族表象」・「巻き込まれ表象」の七つがあり (Davies et al., 2002)、これらの下位尺度の合計得点¹⁰が高いほど情緒的不安定性の程度が強いことを示す (Bergman, Cummings, & Davies, 2014)。SIS は、9—14 歳の青年 924 名 (平均年齢 12.57 歳, $SD = 0.97$) とその親を対象とした調査により、信頼性と妥当性が確認された (Davies et al., 2002)。信頼性は、内的整合性と再検査信頼性の検討により、妥当性は、EST の媒介モデルに基づき、破壊的 IC と適応問題との関連の検討により確認されている。SIS はポルトガル語版 (Silva, Calheiros, & Carvalho, 2016) や中国語版 (Li, Cheung, & Cummings, 2015) などの他言語版に翻訳されている。しかし、わが国では SIS は作成されておらず、EST に基づく検討はほとんどない。そこで本研究は、日本語版 SIS を作成することとする。

日本の研究状況は欧米に比べて遅れているが、両親関係と子どもの適応との関連についての研究は複数ある。川島・眞榮城・菅原・酒井・伊藤 (2008) の 16—19 歳の青年を対象とした研究は、子どもが IC を深刻であると認知するほど、IC への巻き込まれ感が強まり、巻き込まれ感が強まりが IC への自己非難や恐れ認知を強めることで抑うつを高めることを示した。大学 1 年生を対象とした山本・伊藤 (2012) は、子どもが IC の激しさを認知するほど、IC への巻き込まれ感が強まり、巻き込まれ感が強まるほど、抑うつが高くなることを示した。このようなわが国の先行研究の結果は、破壊的 IC が子どもの適応を損ねるという欧米の研究知見と一致するものである。しかし、わが国は実証的研究の蓄積が十分でないことに加え (川島, 2014)、各研究で独自の変数やモデルが考案されており、体系的な研究の流れが確立されていないことが課題とされる (大野, 2015)。わが国の研究を促進させるために、日本語版 SIS を作成し、EST の理論的枠組みがわが国で適用できると示すことは意義がある。

以上より、本研究の目的は、日本語版 SIS を作成し、その信頼性と妥当性を確認することである。具体的には、SIS (Davies et al., 2002) を翻訳して日本語版を作

成し、確証的因子分析による因子構造の確認を行う。尺度の信頼性は、 α 係数をもって内的整合性を検討する。妥当性は、併存的妥当性と構成概念的妥当性をもって検討する。併存的妥当性については、原版 (Davies et al., 2002) の方法と同様に、EST の媒介モデルに基づき、破壊的 IC と適応問題との関連を確認する。情緒的不安定性の高さや破壊的 IC、適応問題の程度の高さは関連すると予想される。原版では、子どもが評定する尺度として、IC の測定に Children's Perception of Interparental Conflict (以下, CPIC とする; Grych, Seid & Fincham, 1992) 尺度、適応の測定に Youth Self Report (以下, YSR とする; Achenbach, 1991) を用いている。本研究においても、原版に準じて使用する尺度を選定した。また、破壊的 IC と適応問題に加えて、IC 時の反応との関連も検討する。SIS は、情緒的不安定性により表出される IC 時の反応を尋ねる内容であるため、IC 時の恐怖や不安といった反応と関連すると予想される。構成概念的妥当性については、SIS で測定する情緒的不安定性が、媒介モデルで仮定されている、破壊的 IC と子どもの適応問題間における媒介効果をもっているかを確認することで検討する。さらに本研究では、先行研究で IC の影響性の性差が示されていることから、日本語版 SIS について、その得点や、他変数との関連に性差があるかどうかあわせて検討する。

方 法

関東圏の公立学校に調査を依頼し、承諾を得た中学校 2 校、高等学校 2 校で、2017 年 6 月から 12 月にかけて質問紙調査を実施した。調査は、担当教員による各学級での一斉配布形式で実施され、担当教員はこちらが用意した調査実施手順書にそって調査を実施した。回答は全て無記名で行われた。調査対象者のうち、現在両親と居住している者、または過去 1 年以内に両親との居住経験がある者を分析対象者とし、回答の欠損が著しいなどの回答の不備がある者を分析から除外した。その結果、分析対象者は 12—18 歳の 682 名 (中学生 379 名、高校生 303 名; 男子 346 名、女子 334 名、不明 2 名) となり、平均年齢は 14.80 歳 ($SD = 1.50$) であった。

調査内容

個人属性 学年、性別、年齢について記入を求めた。また、両親との居住経験について把握するため、現在の保護者との居住形態について「母親・父親の両方と一緒に住んでいる」、「どちらか一方の親と一緒に住んでいる」、「その他 (親戚、祖母や叔母など)と一緒に住んでいる」、「その他 (上記のどれにもあてはまらない)」の中から回答を求めた。「母親・父親の両方と一緒に住んでいる」以外を選択した者には、この過去 1

⁹ SIS の対象は、主観的体験を正確に想起できる青年期前期以降の子どもとされる (Davies et al., 2002)。主観的体験の想起が難しい場合、親が評定する SIMS-PR がある (Cummings & Davies, 2010; 川島・中澤, 2012)。

¹⁰ 合計得点は「建設的な家族表象」を逆転処理している。

年間の両親との居住経験の有無について、「はい」か「いえ」で回答を求めた。

日本語版 SIS 日本語版 SIS は、SIS の原版 (Davies et al., 2002) と改訂版 (Cummings & Davies, 2010) を基に、以下の手続きで作成した。原版の SIS 全 37 項目を、International Society for Pharmacoeconomics & Outcomes Research (以下、ISPOR とする: 稲田, 2015; Wild et al., 2005) のガイドラインに準じた手続きで翻訳し、日本語版を作成した。まず、SIS の原著者の Davies から日本語版尺度作成の許可を得た上で、翻訳の専門家 1 名と英語に精通した心理学を専門とする大学教員 1 名に依頼して原版の順翻訳を行った。二つの訳出について、心理学を専門とする大学教員 1 名と大学院生 2 名が表現の統一などの協議を行い最終的な項目内容を決定した。決定した項目内容について、上記とは別の翻訳の専門家 1 名に依頼して逆翻訳を行った。そして、原著者に逆翻訳したものと原版との等価性についてのレビューを求めた。そして、レビューの結果に基づき修正を加え、再び原著者に確認を求めた結果、原著者からの最終的な承認を得た。教示については、原版と同様に、「次の質問がこの過去 1 年間のあなたにどれほどあてはまっているか答えてください。各文章について以下の 4 つの選択肢からひとつ選んで○をつけてください。」と記し、それぞれの項目について「1: まったくあてはまらない」、「2: 少しあてはまる」、「3: あてはまる」、「4: とてもあてはまる」の 4 件法で回答を求めた。

破壊的 IC 破壊的 IC の程度を測定する Grych et al. (1992) の CPIC 尺度を参考に作成された山本・伊藤 (2012) の子どもが認知した夫婦間葛藤尺度の「葛藤の激しさ」、「葛藤の持続性」、「葛藤の解決」を使用した。各下位尺度は、破壊的 IC の複数の側面からその程度の深刻さを示すものであり、順に 10 項目、7 項目、3 項目で構成されている。本研究では調査対象者の回答の負担を考慮し、因子負荷量や項目内容を踏まえ、「葛藤の激しさ」と「葛藤の持続性」については各 5 項目を選出して使用した。「葛藤の激しさ」は IC の強度や頻度の側面 (例: 「両親はよくけんかをする」)、「葛藤の持続性」は IC の時間的側面を表し (例: 「両親はけんかをしても、すぐに仲直りする (逆転項目)」)」、得点が高いほど各側面における IC の深刻さが大きいことを示す。「葛藤の解決」は IC の解決の程度を表し (例: 「両親はけんかをしても、大きな声を出さずに話し合う」)」、得点が低いほど IC の解決の程度が低いことを示す。この過去 1 年間から現在までについて、それぞれの項目に「1: そう思わない」から「4: そう思う」までの 4 件法で回答を求めた。尺度得点は、逆転項目の処理をした上で、下位尺度ごとに合計得点を算出した。また、各下位尺度を合計し、この合計得点が高いほど破壊的 IC の程度の高さを表す¹¹。

IC 時の恐れ・身体反応 山本・伊藤 (2012) の子どもが認知した夫婦間葛藤尺度の下位尺度「恐れ・身体反応」を使用した。項目内容は、IC 時の子どもに生じる反応についてであり、得点が高いほど IC 時の恐れや緊張感、心配が強いことを示す (例: 「両親がけんかをしていると、不安になる」)。上記の破壊的 IC 尺度と同様に、全 9 項目のうち 5 項目を選出して用いた。回答の求め方、尺度得点の算出と見方は、破壊的 IC 尺度と同様であった。

適応問題 倉本他 (1999) の日本語版 YSR の下位尺度「不安・抑うつ」と「攻撃的行動」を使用した。「不安・抑うつ」は内在化問題である不安や抑うつの程度、「攻撃的行動」は外在化問題である攻撃性の程度を測るものであり、それぞれ 16 項目、19 項目で構成されている。本研究では、回答者への心理的負担を考慮して「不安・抑うつ」の中の自傷や自殺に関する 2 項目を除外して使用した。教示と回答の求め方については、倉本他 (1999) と同様であり、「0: あてはまらない」から「2: よくあてはまる」までの 3 件法で回答を求めた。下位尺度の合計得点が高いほど各問題の程度が高いことを表し、適応の悪さを示す。

倫理的配慮

本調査は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。調査対象者へは、調査への回答の自由意志が尊重されることや、回答を止めることで不利益を受けることはないこと、回答は研究以外の目的では使用せず、個人が分かる形で公表しないことなどを質問紙のフェイスシートおよび口頭で説明した。また、単親家庭の生徒など回答が難しいと予想される調査対象者への配慮として、質問紙の最初のページで調査内容には家族や両親について尋ねる項目があることを断り、回答が難しいと感じた場合、家族に関わらない内容のページへ飛ぶよう教示した。また、フェイスシートには研究実施者の連絡先と、研究や調査について、質問や意見、困ったなと思うことがあれば気軽に連絡してくださいという旨の文章を記載し、その部分を切り離して持ち帰るよう教示した。プライバシー保護のため、質問紙は 1 部ずつ封筒に入れた状態で生徒へ配布し、回答が終わり次第、生徒本人が質問紙を封筒へ入れて封をした。また、担当教員の机間巡視は避けてもらうよう依頼した。

結果

分析には、IBM SPSS Statistics 25 と IBM SPSS Amos 25 を使用した。

¹¹ Davies et al. (2002) と同様に、破壊的 IC を示す得点として各下位尺度を合計した得点を算出した。「葛藤の解決」得点は逆転処理して加算されている。

確証的因子分析 SIS の原版 (Davies et al., 2002) と改訂版 (Cummings & Davies, 2010) を参考に分析を行った。両者は、同じ 7 下位尺度 (情緒的反応, 行動統制不全, 葛藤からの回避, 葛藤への関与, 建設的な家族表象, 破壊的な家族表象, 巻き込まれ表象) で構成されているが, 改訂版は原版からやや変更されている¹²。両者のモデルに従いそれぞれで確証的因子分析を行った結果, 適合度は原版のモデルでは CFI = .814, RMSEA = .070, AIC = 2680.677, 改訂版のモデルでは CFI = .828, RMSEA = .069, AIC = 2330.561 であった。改訂版のモデルのほうが良い結果となったことから, 改訂版のモデルを採用して分析を続行した。下位尺度の「情緒的反応」はさらに「情緒覚醒」と「情緒統制不全」の二つに分けることができ, SIS は 8 下位尺度としても捉えられる (Davies & Forman, 2002)。そこで, 改訂版のモデルについて, この Davies & Forman (2002) に準じて「情緒的反応」を二つの下位尺度に分ける修正を行ったモデルで確証的因子分析を行った結果, 適合度は CFI = .863, RMSEA = .062, AIC = 2010.666 となり適合度の改善がみられた。Hooper, Coughlan, & Mullen (2008) は, 各適合度指標の推奨値として CFI > .95, RMSEA < .07 を提言している。改訂版を修正したモデルの適合度について, RMSEA は基準に達しているが, CFI は基準を満たさなかった。しかしながら, Davies et al. (2002) の原版の適合度 (CFI = .860, RMSEA = .058) と大きな差がないことや, 複雑なモデルでも安定した評価が可能であるとされる RMSEA のほうが基準として適していることから, 本モデルは許容できる範囲であると判断した。各因子に含まれる項目について α 係数を算出した結果, ほとんどの下位尺度で十分な値が得られ (.75—.86), 一定の内的整合性が確認された。しかし, 「行動統制不全」のみ α 係数が著しく低く (.37) 内的整合性が示されなかった。内的整合性が不十分である下位尺度を尺度に含めることは不適切であると判断し, 本研究では「行動統制不全」を除外することとした。上記の改定版の修正モデルについて, 「行動統制不全」を構成する 3 項目を除外したモデルで確証的因子分析を行った結果, 適合度は CFI = .877, RMSEA = .063, AIC = 1723.553 となった。モデル比較の際に有効とされる AIC 値が低くなったことから, 本モデルのほうが良いモデルと判断し, 最終的にこのモデルを日本語版 SIS として採用した¹³。本モデルの構成は, 全 32 項目の 7 下位尺度 (情緒覚醒, 情緒統制不全, 葛藤からの回避, 葛藤への関与, 建設的な家族表象, 破壊的な家族表象, 巻き込まれ表象) であった (Table 1)。

¹² 改訂版では項目番号 9, 20 が削除され, 原版で「情緒統制不全」の項目であった項目番号 10 が「葛藤からの回避」の項目に変更されている (Cummings & Davies, 2010)。

各下位尺度の記述統計と下位尺度間相関を Table 2 に示す。

相関分析 SIS の合計得点と各下位尺度について, 破壊的 IC と適応問題, IC 時の恐れ・身体反応との相関係数を算出した (Table 3)。なお, 全ての尺度で十分な α 係数の値が得られ, 一定の内的整合性が確認された。相関分析の結果, 破壊的 IC とは, 葛藤への関与以外と有意な相関がみられ ($|r| = .18—.55$), 破壊的 IC 得点が高いほど情緒的不安定性の程度が高かった。破壊的 IC の下位尺度との関連については, 葛藤の激しさとは, 全てに有意な相関がみられ ($|r| = .21—.51$), 葛藤の激しさ得点が高いほど情緒的不安定性の程度が高かった。葛藤の持続性とは, 情緒覚醒と葛藤への関与以外と有意な相関がみられ ($|r| = .16—.60$), 葛藤の持続性得点が高いほど情緒的不安定性の程度が高かった。葛藤の解決とは, 情緒覚醒と情緒統制不全以外と有意な相関がみられ ($|r| = .12—.50$), 葛藤への関与を除き, 葛藤の解決得点が高いほど情緒的不安定性の程度が低いことが示された。適応問題については, 不安・抑うつとは, 全てに有意な相関がみられ ($|r| = .12—.44$), 情緒的不安定性得点が高いほど不安・抑うつ程度が高かった。攻撃的行動とは, 情緒覚醒と建設的な家族表象以外と有意な相関がみられ ($|r| = .10—.31$), 情緒的不安定性得点が高いほど攻撃的行動の程度が高かった。恐れ・身体反応とは, 建設的な家族表象以外と有意な相関がみられ ($|r| = .45—.76$), 情緒的不安定性得点が高いほど恐れ・身体反応の程度が高かった。

性差の検討 男女の SIS の下位尺度得点の差について, t 検定を行った結果, 巻き込まれ表象以外の得点で男女の差は有意であり, 小さい効果量を示した (Table 2)。女子のほうの得点が高く, 男子に比べて女子の情緒的不安定性が高いことが示唆された。

また, 男女ごとに, SIS, 破壊的 IC と適応問題との相関係数を算出した (Table 4)。SIS の合計得点については, 男女において破壊的 IC と適応問題と有意な相関がみられ, 全体的に女子のほうが男子に比べて相関係数の絶対値が大きかった (男子: $|r| = .17—.48$, 女子: $|r| = .22—.52$)。SIS の下位尺度についても, 破壊的 IC と適応問題との有意な相関が, 一部の尺度間を除いてみられた。

¹³ 中学生と高校生双方において, 同一内容が測定できているかを確認するために, 校種の測定不変性を検討した。まず, 各校種で十分なデータへの適合を確認した (中学生: CFI = .876, RMSEA = .064; 高校生: CFI = .846, RMSEA = .071)。次に, 各データの因子負荷量について等値制約を置かない配置不変モデルと, 等値制約を置く測定不変モデルを比較した。その結果, 前者は CFI = .862, RMSEA = .048, 後者は CFI = .861, RMSEA = .047 となった。両モデルは, ほとんど変わらない十分な適合度を示したことから, 因子数と因子負荷量の不変性が確認された。

Table 1
日本語版 SIS の各項目と確証的因子分析の結果

項目番号	因子と項目	因子負荷量
1. 情緒覚醒 (Emotional arousal) ($\alpha = .77$)		
1	わたしは悲しくなる	.76
2	わたしはこわくなる	.83
3	わたしは怒を感じる	.31
4	わたしは不安を感じる	.90
2. 情緒統制不全 (Emotional dysregulation) ($\alpha = .81$)		
6	わたしの一日は台無しになる	.68
7	わたしは自分を落ち着かせることができない	.79
8	わたしは嫌な気持ちを振りはらうことができない	.88
3. 葛藤からの回避 (Avoidance) ($\alpha = .82$)		
10	わたしは自分の気持ちを隠そうとする	.68
13	わたしはどうしたらいいかわからない	.73
18	わたしは静かにしようとする	.64
19	わたしは何かできればよいと思っても結局何もしないで終わる	.61
22	わたしはただ待って、事態がよくなるように願う	.64
24	わたしはできるだけ二人から離れていたいと思う	.53
26	わたしは二人から逃げ出そうとする (たとえば、部屋を出るなど)	.59
4. 葛藤への関与 (Involvement) ($\alpha = .75$)		
5	わたしはどちらか、または両方に対してかわいそうに感じる	.52
14	わたしは他の物事を持ちだして二人の気をそらそうとする	.55
15	わたしは最大限いい子であろうとする (二人にいいことをするなど)	.57
21	わたしは二人のために問題を解決しようとする	.71
23	わたしはどちらか、または両方を落ち着かせようとする	.72
25	わたしは物事がうまくいっているようにふるまおうとする	.47
5. 建設的な家族表象 (Constructive family representations) ($\alpha = .86$)		
28	家族はまだうまくやっっていける	.74
29	わたしは二人がお互いを今も愛し合っていると知っている	.84
30	わたしはすべてがうまくいくことを知っている	.83
37	わたしは二人がお互いの違いを解決できることを信じている	.68
6. 破壊的な家族表象 (Destructive family representations) ($\alpha = .79$)		
32	わたしは家族の将来が心配になる	.82
33	わたしは二人が次に何をするのか心配になる	.78
34	わたしは二人が仲良くする方法を知らないからけんかをするのだと思う	.45
36	わたしは二人が別れたり、離婚したりするのではないと思う	.76
7. 巻き込まれ表象 (Conflict spillover representations) ($\alpha = .80$)		
17	わたしは板ばさみになっているように感じる	.63
27	わたしは二人がわたしに腹を立てているように感じる	.69
31	わたしのせいだと思う	.77
35	わたしは二人に責められているように思う	.80
削除した項目		
9	わたしは凍ってしまったかのように動かなくなる	
20	わたしは二人の問題ばかり考えてしまう	
行動統制不全 (Behavioral dysregulation) ($\alpha = .37$)		
11	わたしは家族に怒鳴ったり、こころないことを言ったりする	
12	わたしは家族をたたいたり、けったり、ひっぱいたり、物を投げたりする	
16	わたしはおどけてみたり、問題を起こそうとしたりする	

注) 建設的な家族表象の項目には「両親が言い争いをしている、」それ以外の項目には「両親が言い争いをしていると、」の文言が文頭に付される。各因子から項目へのパスは全て、 $p < .001$ で有意であった。

Table 2
日本語版 SIS の各下位尺度の相関係数, *M*, *SD*

								性差	
	1	2	3	4	5	6	7	<i>t</i>	<i>r</i>
1		.63***	.52***	.54***	.13**	.52***	.41***	-4.68***	0.18
2			.49***	.47***	-.03	.53***	.47***	-3.49***	0.13
3				.37***	-.01	.51***	.50***	-2.19*	0.08
4					.26***	.42***	.39***	-4.08***	0.16
5						-.15***	.00	-2.26*	0.09
6							.49***	-2.22*	0.09
7								-1.14	0.04
全体 <i>M</i>	9.63 (3.47)	5.40 (2.57)	16.15 (5.47)	10.09 (3.59)	10.34 (3.55)	6.73 (2.96)	5.96 (2.64)		
男子 <i>M</i>	9.03 (3.35)	5.06 (2.39)	15.70 (5.35)	9.54 (3.29)	10.04 (3.45)	6.48 (2.84)	5.84 (2.53)		
女子 <i>M</i>	10.27 (3.50)	5.75 (2.71)	16.63 (5.58)	10.65 (3.78)	10.67 (3.63)	6.98 (3.04)	6.07 (2.74)		

注) 表の1—7の項目は、Table 1の下位尺度の項目番号と対応する。()の値は*SD*を表す。効果量は*r*値で算出した。

p* < .05, *p* < .01, ****p* < .001

Table 3
日本語版 SIS と関連変数との相関 (全体)

	破壊的 IC ($\alpha = .88$)	破壊的 IC の下位尺度			適応問題		恐れ・ 身体反応 ($\alpha = .88$)
		葛藤の 激しさ ($\alpha = .81$)	葛藤の 持続性 ($\alpha = .80$)	葛藤の 解決 ($\alpha = .74$)	不安・ 抑うつ ($\alpha = .85$)	攻撃的 行動 ($\alpha = .86$)	
0. 情緒的不安定性	.44***	.51***	.32***	-.24***	.44***	.19***	.76***
1. 情緒覚醒	.18***	.32***	.06	-.04	.24***	.06	.66***
2. 情緒統制不全	.25***	.35***	.16***	-.07	.34***	.12**	.59***
3. 葛藤からの回避	.27***	.32***	.17***	-.16***	.35***	.15***	.59***
4. 葛藤への関与	.03	.21***	-.06	.12**	.20***	.10**	.49***
5. 建設的な家族表象	-.55***	-.29***	-.60***	.50***	-.12**	-.03	.00
6. 破壊的な家族表象	.40***	.44***	.32***	-.22***	.36***	.15***	.68***
7. 巻き込まれ表象	.25***	.33***	.16***	-.13**	.42***	.31***	.45***

p* < .05, *p* < .01, ****p* < .001

Table 4
日本語版 SIS と関連変数との相関 (男女ごと)

	破壊的 IC		破壊的 IC の下位尺度						適応問題			
			葛藤の 激しさ		葛藤の 持続性		葛藤の 解決		不安・ 抑うつ		攻撃的 行動	
0	.34***	.51***	.48***	.52***	.20***	.42***	-.17**	-.32***	.39***	.47***	.17**	.22***
1	.18*	.23***	.31***	.31***	-.03	.15**	-.01	-.09	.22***	.22***	.08	.03
2	.17**	.31***	.33***	.36***	.06	.26***	-.02	-.12*	.27***	.37***	.06	.16**
3	.18***	.34***	.28***	.35***	.06	.27***	-.09	-.24***	.32***	.37***	.08	.21***
4	-.02	.06	.20***	.18***	-.12*	-.01	.16**	.07	.20***	.17**	.09	.10
5	-.47***	-.63***	-.22***	-.37***	-.52***	-.68***	.44***	.56***	-.04	-.22***	-.08	.00
6	.33***	.46***	.39***	.47***	.23***	.39***	-.16**	-.27***	.33***	.33***	.16**	.15**
7	.20***	.29***	.33***	.32***	.10	.21***	-.08	-.18***	.37***	.46***	.24***	.38***

注) 左の0—7の項目はTable3と同様である。男子の値は左列、女子の値は右列に記載した。

p* < .05, *p* < .01, ****p* < .001

Table 5
媒介分析に用いた変数間の相関

	2	3	4
1. 破壊的 IC	.44***	.29***	.21***
2. 情緒的不安定性		.44***	.19***
3. 不安・抑うつ			.51***
4. 攻撃的行動			

*** $p < .001$

媒介分析 破壊的 IC と適応問題間における情緒的不安定性の媒介効果を検討するために、bootstrap 法による間接効果の有意性の検定を行った（サンプリング回数 5,000, 信頼区間 95 %）。Table 5 に各変数の単相関を示す。破壊的 IC を独立変数、不安・抑うつを従属変数とした媒介変数なしのモデルでは、 $\beta = .31$ であった。そこに SIS を媒介変数として組み込んだモデルでは、標準化総合効果が $\beta = .31$ 、標準化直接効果が $\beta = .14$ 、標準化間接効果が $\beta = .17$ (95%CI [.12—.22]) であり、有意な間接効果が確認された (Figure 1)。破壊的 IC を独立変数、攻撃的行動を従属変数とした媒介変数なしのモデルでは、 $\beta = .22$ であった。そこに SIS を媒介変数として組み込んだモデルでは、標準化総合効果が $\beta = .22$ 、標準化直接効果が $\beta = .16$ 、標準化間接効果が $\beta = .05$ (95%CI [.01—.10]) であり、有意な間接効果が確認された (Figure 1)。

考 察

日本語版 SIS の信頼性と妥当性 本研究では、情緒的不安定性の測定尺度である SIS の日本語版作成を行った。確証的因子分析の結果から、情緒覚醒、情緒統制不全、葛藤からの回避、葛藤への関与、建設的な家族表象、破壊的な家族表象、巻き込まれ表象の 7 下位尺度、計 32 項目で構成される尺度となり、原版の SIS と概ね同様の因子構造であることが確認された。原版と異なる点は、下位尺度の行動統制不全を含めていない点である。本研究では、行動統制不全の α 係数が著しく低かったため (.37)、本尺度から除外するこ

ととした。原版においても行動統制不全の α 係数は低く (.52, .65), このことについて Davies et al. (2002) は、IC 時の防衛的な姿勢として叩くや罵るといった反応を示す行動統制不全は、情緒的不安定性を評価する重要な要素であるが、親への反抗的な態度など別の側面が反映されたため本来の内容を測定できなかった可能性があると考えしている (Davies et al., 2002)。本研究では行動統制不全を含めないモデルを採用したが、行動統制不全の内容がわが国において妥当であるかなど、今後さらなる検討が必要であろう。

信頼性については、各下位尺度の α 係数を算出した結果、十分な内的整合性が確認された。併存的妥当性については、EST の媒介モデルに基づき、情緒的不安定性と、破壊的 IC と適応問題との相関係数を算出した。その結果、情緒的不安定性の程度が高いほど破壊的 IC、不安・抑うつ、攻撃的行動の程度が高いことが示された。この結果は、媒介モデルで想定される関連と一致するものであった。また、IC 時の恐れ・身体反応との相関係数を算出した結果、情緒的不安定性の高さが IC 時の恐れ・身体反応の高さと関連することが示され、仮説が支持された。構成概念的妥当性については、破壊的 IC と情緒的不安定性、適応問題について媒介分析を行った。その結果、情緒的不安定性の間接効果は有意であり、情緒的不安定性が破壊的 IC と適応問題の媒介要因として機能していることが明らかになった。以上より、日本語版 SIS は一定の信頼性と妥当性があることが確認された。

情緒的不安定性と破壊的 IC 情緒的不安定性の高さは破壊的 IC と関連することが示されたが、SIS の下位尺度ごとに関連の強さが異なっていた。破壊的 IC と情緒的不安定性との関連については、原版でも SIS の下位尺度ごとに関連の程度は異なっており ($|r| = .08-.55$), 本研究の結果と一致するものであった。子どもはこれまでの経験で自身の情緒的不安定性の維持に有効であった反応をするように動機づけられるため、IC 時の反応は個人差がある (Davies et al., 2002)。例えば、同じように情緒的不安定性が高くても、ある子どもは葛藤を回避しようとするが、ある子どもは葛藤を収めるために積極的に親へ関与する可能性がある。破壊的 IC の程度の強さが SIS の下位尺度が表す反応全てに一律の強さで関連しないことは、このような個人差が背景にあると考えられる。

また、破壊的 IC の側面ごとに相関分析を行った結果、各側面で SIS の下位尺度との関連の仕方が異なっていた。葛藤の激しさは、全ての SIS の下位尺度と関連した。葛藤の激しさは子どもの情緒的不安定性を高める強力な要因であり、情緒的不安定性を維持させるための様々な反応を引き起こすことが示唆された。葛藤の激しさと中程度以上の相関を示した下位尺度は、情緒覚醒と情緒統制不全、葛藤からの回避、破壊的な家

Figure 1. 適応問題との媒介分析の結果。

注) 値は標準化後の係数。括弧内の数字は媒介変数を統制する前の直接効果を示す。上段の数値が従属変数を不安・抑うつにした場合の結果で、下段の数値 (太字) が従属変数を攻撃的行動にした場合の結果である。

*** $p < .01$, ** $p < .001$

族表象，巻き込まれ表象であった。つまり，葛藤の頻度や激しさが高いほど，子どもは強い情緒的反応を示し，葛藤から回避しようとする傾向が高くなる。また，両親関係を危惧する気持ちや，葛藤に巻き込まれる感覚が強まると推測される。

葛藤の持続性と葛藤の解決は，一部の下位尺度では相関がみられず，葛藤の激しさに比べて SIS との関連の程度は弱かった。しかし，建設的な家族表象とは強い相関がみられた。このことから，両親関係へ建設的な表象をもつためには，IC の頻度や激しさが少ないこと以上に，両親が葛藤を乗り越えて関係を建設的に維持しようとする姿勢を子どもにみせることが重要であると示唆された。

情緒的不安定性と適応問題 全体的に情緒的不安定性は，攻撃的行動より不安・抑うつとの相関の程度が強かった。また媒介分析でも，不安・抑うつのほうが攻撃的行動に比べて，破壊的 IC と情緒的不安定性から受ける影響が大きかった。これらの結果から，情緒的不安定性は不安・抑うつといった内在化問題につながりやすいことが示された。原版では，内在化問題 ($|r| = .21-.51$) のほうが外在化問題 ($|r| = .02-.33$) に比べて情緒的不安定性との関連が強いことが示されている (Davies et al., 2002)。また，情緒的不安定性と適応との関連についてのレビューでは，情緒的不安定性が内在化問題を予測する研究結果のほうが，外在化問題を予測する研究結果に比べて多いと報告されている (Davies et al., 2016)。本研究も，これらの先行研究と一致する結果であった。Davies et al. (2002) は，情緒的不安定性が高いと，安全・安心の感覚の維持へ多くの心的エネルギーが割かれてしまい，適応を保つ上で重要な発達課題の達成が阻害されるため，内在化問題につながりやすいと主張する。

内在・外在化問題などの適応の側面により情緒的不安定性の予測力が異なる理由はまだ明らかになっておらず，Davies et al. (2016) は，情緒的安定性が幅広い適応の側面と関連するメカニズムを解明する必要があると主張する。わが国では，IC と内在化問題との関連を示した研究は複数あるが，外在化問題との関連を検討した研究は少ない。今後は，外在化問題を含めた様々な適応の側面から，IC の影響性を研究する必要がある。

また，SIS の下位尺度ごとにみると，適応問題と最も関連が弱かったのは建設的な家族表象であり，不安・抑うつとは弱い相関，攻撃的行動とは無相関であった。良好な両親関係の認知と自尊心の高さには関連があることから (前島・小口，2001)，両親への建設的な表象をもつことは自尊心などのポジティブな適応の側面と関連しやすい可能性がある。一方で，適応問題と最も強く関連したのは巻き込まれ表象であり，不安・抑うつと攻撃的行動の両方で中程度の相関を示した。IC

を自分のせいであると自己非難するなど葛藤へ巻き込まれたように感じることは，子どもの内在・外在化問題の高さと関連していた。先行研究では，子どもが IC の板ばさみになることは，子どもの適応を低めることが示されており (Amato & Afifi, 2006; 川島他，2008; 山本・伊藤，2012)，当該領域の研究で重要な要因として扱われている。これらのことから，IC に巻き込まれる感じをもつことは，子どもへの心的負担をもたらす，適応の脆弱性を高めると考えられる。子どもの適応を保つためには子ども自身が IC に巻き込まれていないように感じる事が大切である。

性差の検討 男女ごとの相関分析の結果，多くの尺度間で女子のほうが男子に比べて，相関係数の絶対値が大きく，関連が強いことが示唆された。女子のほうが，破壊的 IC が深刻であるほど，強い情緒的反応を示して両親関係の表象が損なわれやすいことや，情緒的不安定性が適応問題につながりやすいことが示唆された。特に男女で異なったのは，葛藤の持続性と解決についての関連であった。女子では男子より，葛藤の持続性や解決が，情緒的不安定性と強く関連していた。この関連は，女子が IC の長引く程度や，解決の程度という様々な側面から IC の実質的な意味合いを察知し，情緒的不安定性を高めやすいことを示唆している。先行研究でも，女子のほうが男子より IC への感受性が高く，情緒的不安定性が高いことが示されており (Davies et al., 2002)，本研究の結果と一致していた。しかし，先行研究の中には，男子のほうが IC の影響をより強く受けることを示唆する研究 (川島他，2008) もあり，IC の影響性の性差を明らかにするために今後もさらなる検討をする必要がある。

本研究のまとめ，および限界と課題 本研究は，EST に基づき日本語版 SIS を作成し，一定の信頼性と妥当性があることを確認した。日本語版 SIS の作成を通して，IC と青年の適応との関連を検討した結果，わが国においても，破壊的 IC は情緒的不安定性を高めることで，子どもの適応の脆弱性を高めることが明らかになった。

これまでわが国では，EST はもちろん，IC と子どもの適応との関連について十分な研究がなされてこなかった。近年，研究は増えてきたものの，各研究で使用される変数やモデルは異なっており，一貫した研究の流れがないことが課題とされている (大野，2015)。多くの子どもが両親関係の問題を抱えていると推測されるが，一般に両親関係の重要性は漠然と認識されるにとどまっており，当事者の親でさえも自分たちの夫婦関係の重要性を実感していない場合が少なくないと指摘されている (川島，2014)。よりケアの必要性が高いとされる別居・離婚家庭などの高葛藤家庭の子どもの研究においても，研究の蓄積は不十分であり，さらなる研究が求められている (直原・安藤，

2018)。両親関係の重要性を一般に広く認知させ、問題の予防や当事者への支援・ケアを推進させるために、研究の枠組みを確立させ研究を蓄積することが急がれる。日本における EST 適用の妥当性を示した本研究を端緒に、今後わが国での研究が進むことが期待される。

次に本研究の限界を述べる。第一に、調査対象者の年齢についてである。SIS は青年期の子ども用の尺度であり、小学校中学年から高校生くらいを対象に使用されている (Davies et al., 2016)。本研究の対象は中高生のみであった。第二に、再検査信頼性が検討できなかった点である。第三に、妥当性検討のために親の評定を扱えなかった点である。原版では、親からも IC の程度や子どもの IC 時の反応を測定し、それらと SIS の関連を検討している。第四に、EST の媒介モデルについて性別や学年を分けずに検討した点である。本研究は、日本語版 SIS の妥当性を検討することを目的としたため、個人要因を区別した媒介モデルの詳細な検討は行わなかった。しかし、IC の影響性には個人要因が関わることから、性別や学年により IC の影響性に違いがみられる可能性がある。今後、上記の限界点を含めて、日本語版 SIS や EST の媒介モデルについてさらなる検証を重ねていく必要がある。

今後、日本語版 SIS の使用並びに、当領域の研究を進める上で課題がいくつかある。第一に、日本独自の家族風土についてである。EST を始め、両親関係が子どもに与える影響に関する研究の知見は欧米を中心に蓄積されている。しかし、わが国の夫婦関係は欧米の夫婦関係と異なる特徴をもつため、わが国の家族風土を踏まえた研究を進める必要があると指摘されている (大野, 2015)。例えば、「家庭内別居」という言葉に表される情緒的交流が乏しいにもかかわらず婚姻関係を続けている夫婦がいることは日本特有であると指摘されている (大野, 2015)。このような交流が乏しい夫婦の場合、口論などの顕在的葛藤よりも、無視や非言語的な葛藤という形で IC が表出されやすいと推測される。もし、このような特徴をもつ両親の場合、SIS の使用には注意が必要である。SIS は、青年が両親の口論時の反応について回答し、情緒的安定性を測定する尺度である。そのため、IC が口論を伴わない形で表出されている場合、SIS で情緒的安定性を評定することが難しい。実際に本研究の調査では、「両親が言い争いをしたことがないから分からない」といった理由で回答が難しいという意見が調査対象者から寄せられた。上記のケースは、両親関係が良好であり外顯的な IC を見たことがない青年も該当すると考えられる。このように一部の青年に適用が難しい SIS の問題はわが国に限ったことではないが、その家族風土から IC が非言語的な葛藤として表出されやすいわが国では、項目の修正や教示の工夫など対応の必要性がよ

り高いと考えられる。

第二に、調査の実用性である。わが国では、夫婦関係に関わる内容の調査は協力者が得られにくいことや (高橋, 1998)、学校での調査実施が困難であることが指摘されている (菊地・富田, 2016)。調査対象者への倫理的配慮や調査の実用性の観点から、日本語版 SIS の使用には注意が必要である。先行研究では SIS のいくつかの下位尺度を選定し、下位尺度ごとの得点やそれらの合計得点を使用することが多い (例えば, Bergman et al., 2014)。日本語版 SIS を使用する際、調査対象者や研究内容に応じてこのような使用の仕方が可能であると考えられる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

引用文献

- Achenbach, T. M. (1991). *Integrative guide for the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF profiles*. Burlington: University of Vermont, Department of Psychiatry.
- Amato, P. R., & Afifi, T. D. (2006). Feelings caught between parents: Adult children's relations with parents and subjective well-being. *Journal of Marriage and Family*, 68, 222-235.
- Bergman, K. N., Cummings, E. M., & Davies, P. T. (2014). Interparental aggression and adolescent adjustment: The role of emotional insecurity and adrenocortical activity. *Journal of Family Violence*, 29, 763-771.
- Cummings, E. M., & Davies, P. T. (1996). Emotional security as a regulatory process in normal development and the development of psychopathology. *Development and Psychopathology*, 8, 123-139.
- Cummings, E. M., & Davies, P. T. (2010). *Marital conflict and children: An emotional security perspective*. New York: Guilford Press.
- Cummings, E. M., Davies, P. T., & Campbell, S. B. (2000). *Developmental psychopathology and family process: theory, research, and clinical implications*. New York: The Guilford Press.
- (カミングス, E. M.・デイヴィーズ, P. T.・キャンベル, S. B. 松浦 素子 (訳) 子どもの発達と夫婦のサブシステム 菅原 ますみ (監訳) (2006). 発達精神病理学——子どもの精神病理の発達と家族関係—— (pp. 302-350) ミネルヴァ書房)
- Davies, P. T., & Cummings, E. M. (1994). Marital conflict and child adjustment: An emotional security hypothesis. *Psychological Bulletin*, 116, 387-411.
- Davies, P. T., Dumenci, L., & Windle, M. (1999). The interplay between maternal depressive symptoms and marital distress in the prediction of adolescent adjustment. *Journal of Marriage and Family*, 61, 238-254.
- Davies, P. T., & Forman, E. M. (2002). Children's patterns of preserving emotional security in the interparental

- subsystem. *Child Development*, 73, 1880–1903.
- Davies, P. T., Forman, E. M., Rasi, J. A., & Stevens, S. I. (2002). Assessing children's emotional security in the interparental relationship: The security in the interparental subsystem scales. *Child Development*, 73, 544–562.
- Davies, P. T., Martin, M. J., & Cicchetti, D. (2012). Delinquency: the sequelae of destructive and constructive interparental conflict for children within an evolutionary framework. *Developmental Psychology*, 48, 939–955.
- Davies, P. T., Martin, M. J., & Sturge-Apple, M. L. (2016). Emotional security theory and developmental psychopathology. In D. Cicchetti (Ed.), *Developmental Psychopathology: Theory and Method* (3rd ed., Vol. 1, pp. 199–264). New Jersey: Wiley.
- Grych, J. H., & Fincham, F. D. (1990). Marital conflict and children's adjustment: A cognitive-contextual framework. *Psychological Bulletin*, 108, 267–290.
- Grych, J. H., Harold, G. T., & Miles, C. J. (2003). A prospective investigation of appraisals as mediators of the link between interparental conflict and child adjustment. *Child Development*, 74, 1176–1193.
- Grych, J. H., Seid, M., & Fincham, F. D. (1992). Assessing marital conflict from the child's perspective. *Child Development*, 63, 558–572.
- Hooper, D., Coughlan, J., & Mullen, M. (2008). Structural equation modelling: Guidelines for determining model fit. *Electronic Journal of Business Research Methods*, 6, 53–60.
- 稲田 尚子 (2015). 尺度翻訳に関する基本指針 行動療法研究, 41, 117–125.
- 直原 康光・安藤 智子 (2018). 別居・離婚後の父母葛藤は子どもの適応等にどのような影響を与えるか 筑波大学心理学研究, 55, 73–85.
- 川島 亜紀子 (2014). 夫婦げんかと子どものこころ——健康な家族とはなにか—— 新曜社
- 川島 亜紀子・眞榮城 和美・菅原 ますみ・酒井 厚・伊藤 教子 (2008). 両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連 教育心理学研究, 56, 353–363.
- 川島 亜紀子・中澤 潤 (2012). 両親間葛藤と幼児の精神的健康——葛藤時における幼児の情緒的安定性—— 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集, 405.
- 警察庁 (2019). 平成 30 年における少年非行, 児童虐待及び子供の性被害の状況 Retrieved from https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikou_gyakutai_sakusyu/H30.pdf (2019 年 11 月 16 日)
- 菊地 創・富田 拓郎 (2016). 夫婦間葛藤が児童の抑うつ症状に与える影響——児童の家族関係認知を媒介したモデルの検討—— カウンセリング研究, 49, 53–63.
- 厚生労働省 (2020). 平成 30 年人口動態統計 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/houkoku18/dl/all.pdf> (2020 年 10 月 18 日)
- 倉本 英彦・上林 靖子・中田 洋二郎・福井 知美・向井 隆代・根岸 敬矩 (1999). Youth Self Report (YSR) 日本語版の標準化の試み——YSR 問題因子尺度を中心に—— 児童青年精神医学とその近接領域, 40, 329–344.
- Li, Y., Cheung, R. Y. M., & Cummings, E. M. (2015). Marital conflict and emotional insecurity among chinese adolescents: Cultural value moderation. *Journal of Research on Adolescence*, 26, 316–333.
- 前島 芳名子・小口 孝司 (2001). 父母の不和が子どもの自尊心, 情緒安定性ならびに攻撃性に及ぼす影響——父は情緒に, 母は行動に—— 家族心理学研究, 15, 45–56.
- 大野 愛実 (2015). 青年の認知からみた両親間不和——CPIC 尺度の因子構造と研究での使用方法に着目した文献比較—— お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 17, 65–76.
- Silva, C. S., Calheiros, M. M., & Carvalho, H. (2016). Security in the interparental subsystem (SIS) scale: Psychometric characteristics in a sample of portuguese adolescents. *Journal of Family Violence*, 31, 147–159.
- 菅原 ますみ (2016). 子どもの青年期への移行, 巣立ちと夫婦関係 宇都宮 博・神谷 哲司 (編) 夫と妻の生涯発達心理学——関係性の危機と成熟—— (pp.158–172) 福村出版
- 高橋 直美 (1998). 両親間および親子間の関係と子どもの精神的健康との関連について 家族心理学研究, 12, 109–123.
- Wild, D., Grove, A., Martin, M., Eremenco, S., McElroy, S., Verjee-Lorenz, A., ... ISPOR Task Force for Translation and Cultural Adaptation. (2005). Principles of good practice for the translation and cultural adaptation process for patient-reported outcomes (PRO) measures: Report of the ISPOR task force for translation and cultural adaptation. *Value Health*, 8, 94–104.
- 山本 倫子・伊藤 裕子 (2012). 青年期の子どもが認知した夫婦間葛藤と精神的健康との関連 家族心理学研究, 26, 83–94.

—— 2020. 1. 30 受稿, 2020. 11. 28 受理 ——